

令和4年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属高等学校天王寺校舎

1 附属高等学校天王寺校舎の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属高等学校天王寺校舎

(2) 所在地

大阪府大阪市天王寺区南河堀町4-88

(3) 学級数・収容定員

12学級(1学年4学級) 収容定員480人(1学級40人)

(4) 幼児・児童・生徒数

459人(男子233人・女子226人) (令和3年4月1日現在)

(5) 教職員数

校長(併任) 1人、副校長 1人、主幹教諭 1人、教諭 29人(うち、臨時的雇用5人、育児休業1人、再雇用職員2人)、非常勤講師 10人
事務職員 3人(専任1人、事務補佐員2人)、臨時用務員(用務員) 2人

2 附属高等学校天王寺校舎の特徴

本校は、開校以来附属天王寺中学校とともに6年一貫教育の研究、実践を続けてきた。また、令和三年度までSSHの指定を受け、現在はその成果を発揮しながら教育研究を継続している。

生徒の自主性を重んじ、多様な経験と活発な議論を通じて、時代を問わず通用する生きる力と、自律的に責任を持って行動する力を育てることを目指している。

3 附属高等学校天王寺校舎の役割

- (1) 大阪教育大学と一体となって、教育の理論と実際に関する研究を行うこと。
- (2) 本学の教育実習機関として、実習生を随時受け入れ、適切な指導を行うこと。
- (3) 教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てること。
- (4) 本学が行う現職教員の再教育の一端を担うこと。

4 附属高等学校天王寺校舎の学校教育目標

- 正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。
- 強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。
- 他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。
- 社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。

5 附属高等学校天王寺校舎の学校教育計画

1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。
2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取り組みを行う。
3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

6 附属高等学校天王寺校舎令和3年度 重点目標(評価項目)、具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	1. 生徒の学力と、「生きる力」を育てる活動を、各教科・分掌で工夫し、実践する。また、生徒会・自治会やホームルーム等の集団における、生徒の自主性と主体性に基づく諸活動を支援する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 生徒の学力向上と、 自律的な学習・生活習慣 の確立を進める。特に、 自宅学習における自立 性、主体性の育成を図る。	学年を問わず、授業内に読むこと、話すことの活動を重点的に取り入れ、自立してテキストに向き合う学習者を育てる。(国語科)	担当者ごとに、読むこと、話すことの活動を授業内に取り入れることができた。活動を通して、読書に親しみ、主体的に学ぶ姿勢を涵養することができた。	学習活動を通じて、それぞれの学習者が獲得する言語的リテラシーについて、さらに検討を深め、授業との関係性を分析していく必要がある。	A		A	
	社会科で育てたいコンピテンシーを考えて共有化し、生徒自身が自主的・自律的に学習をし、学びを深めていくことができるように指導する。公民的資質・能力の育成を目標とし、各授業のなかで多角的な観点から思考できる能力の育成を図る。(社会科)	公民的資質・能力の育成を目標として、多面的・多角的な観点から思考する授業の実施を行うことができた。特に、生徒自身が自主的・自律的に調査し、発表するような場面を設定することができた。	教科として、さらなる学力向上を目指した授業研究を行う。また、自宅学習における自立性、主体性の育成も図ることができるよう、教科として検討していく。	A		A	
	課題解決的な学習過程で授業を進める中で自主・自律的な行動能力を高める。課題解決的な学習過程を中心とするため、ルールや練習方法など自分たちで調べ、技能の向上に繋がるように指導する。(保健体育科)	グループでの活動を中心とし、自分たちでルールの確認を行いながら各種目に取り組むことができた。また、高校では男女共習でも自分たちで練習方法について話し合い、練習することを通して技能の向上や協力してスポーツを楽しむことを経験させることができた。	生徒がより主体的に活動を選択できるようになるためのチームでの活動と教え込みのバランスを考える。	A		B	

	個に応じた学びを取り入れる。自己調整学習ができるよう、個々の生徒が課題を設定し、学び、振り返る機会を設け、それらを教師が支援する。(英語科)	パフォーマンス課題ごとに生徒一人ひとりが取り組みを振り返り、それらをもとに教師が形成的評価をすることができた。	振り返りをおこなう頻度や主体性評価の方法については、引き続き研究が必要である。	A		A	
	GoogleClassroom や(中)GIGA 端末・(高)生徒端末等生徒の学習環境の運用支援を行い、自立的・主体的学習の支援を行う。(教務部)	中高共通して学習の基盤となる Google Classroom の運用を行った。中学校では GIGA 端末本体の運営支援や付随したプリンターの設置、学習 e-ポータル導入に向けた検討を行った。高校については生徒端末の導入を行い、運用の検討や学習支援を行った。	BYOD の導入後、時間割変更など教室掲示のうち電子媒体化できるものを事前に検討しておく。	A		A	
	①学芸会や音楽会(中)、附高祭や音楽祭(高)等の行事や議会運営等の学校生活のあらゆる場面で生徒の主体的で自立的な活動や自治を支援し、生徒が成長できる場を保障する。 ②十分な感染対策と行事開催を両立させ、生徒の達成感や自己肯定感を育む方策を提案し主導する。(生徒指導部)	①コロナ禍以前と同等の活動ができるよう、生徒が主体的・自立的に取り組み、成長できる場を設定することができた。 ②十分な感染対策と行事開催を両立させ、昨年度よりもより充実させることができた。	来年度に向けて、生徒がより主体的・自立的に活動できるよう、中高生徒指導部で連携を行う。また、生徒の達成感や自己肯定感のさらなる向上を目指し、生徒とともに改善策を検討する。	A		A	
(2)互いの個性と能力を尊重する態度を育成し、協働を通じて個々の生徒の力量を十分に発揮させる。	討論活動、発表活動とそれに至る話し合いや意見交流の機会を担保し、協働を通じて個人が様々な学びを得ることのできる学習集団を育てる。(国語科)	様々な言語活動の場を活用し、主体的に自己の意見を表現する姿勢、他者の意見を受け止める姿勢を涵養することができた。	生徒個々の能力や興味に応じて、一人ひとりがさらに主体的に能力を発揮し、他者と協働して成果を生み出す場の設定。	B		B	
	グループワークを中心としたアクティブ・ラーニング等を授業に取り入れ、各々の生徒の傾向や能力を明らかにさせ分担・統合の姿勢が育まれるよう努める。そのためにも、それに相応しい授業を用意する必要があり、つまりは教育内容を構築しなければならない。(数学科)	グループワークを中心としたアクティブ・ラーニング等の活動を授業の中で取り入れることにより、各生徒の改善すべき課題や授業者が育成すべき生徒の能力などの見当をつけることができた。	見当をつけた内容の是非を問いながら、授業実践を行い、実践研究のデータの蓄積を行う。	B		B	
	実験や観察などを通して「協働する能力」や「科学的に探究する力」を伸ばすための授業実践に取り組む。ICTを活用して情報を共有させる。(理科)	複数人で協働して行う実習・実験を実施し、議論の機会を設けた。ICT機器の活用も進めている。	実施している実習・実験の『探究のレベル』を分類し、各段階における生徒の達成度を評価する。	A		B	

ICT 機器を利用した動画の撮影やチームでの活動を通して、お互いに成長し合えるように協働的な活動を取り入れる。(保健体育科)	高校の陸上の授業のなかで、自分たちで動画を撮影し、動きを客観視しながらアドバイスしあうことで動きの改善に繋げることができるなど、協働的な学習ができた。また、中高ともにホワイトボードや作戦板、学習カードを用いたことで、話し合いを深め、チームでの学習が活性化し、チーム内で成長を実感しながらスポーツを楽しむことを経験させることができた。	陸上など、球技以外のスポーツでのICTの活用の仕方について、活用方法を引き続き模索する。	A		A	
協働的な学びの質を高める。一人ひとりの個性・能力が十分に発揮され、自己肯定感を高められるよう、タスクのデザインやグループワークの評価方法を工夫する。(英語科)	生徒一人ひとりの個性や能力が発揮されるような協働的な学びの設計に努めた。ペアやグループでのパフォーマンス課題を与え、個人ではなくペアやグループ全体のパフォーマンスを評価する実践も行うなど、タスクのデザインを工夫し、生徒の学びの質を高めることをめざした。	協働的な学びによって自己肯定感や生徒の学びの質が実際に高まったかを検証し、さらなる授業改善につなげたい。	B		B	
グループでのアンサンブルや発表の機会を多く取り入れ、自己表現することの喜びを生徒自身が実感できる授業を展開する。(音楽科)	題材のまとめとしてグループでの発表を多く取り入れ、中高どの学年においても発表する機会を大切に、アンサンブルを通して生徒自身が自己表現する喜びを実感できるよう授業を展開した。	多様な発表形態を模索し、実践へとつなげていく。	A		A	
中高合同で特別支援研修を開催し、個別最適な学びの実現に努める。(健人部)	特別支援研修を開催し、元大阪教育大学附属特別支援学校相談・支援センターアドバイザーの森田先生に、「高機能自閉症の理解と対応」というテーマでご講演いただいた。	講師の先生が紹介してくださった事例が小学校での事例であったため、少し附中高生にあてはめてイメージしにくかった。附中高生にあてはまる事例について、中高の教員でグループワークを行い、意見交換を行いたい。	A		A	
全教員が生徒会・自治会活動(部活動指導、議会・委員会の運営等)に積極的に関わる体制を構築し、分掌として組織的に支援する。校種や発達段階に応じた指導体制を確立し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる学校を目指す。(生徒指導部)	生徒会・自治会活動(部活動指導、議会・委員会の運営等)をより活発にし、様々な取り組みを実現することができた。また、校種や発達段階に応じた指導体制も構築し、生徒一人ひとりが成長し活躍できる場面をつくることができた。	生徒会・自治会活動に対する教員の関わりがまだまだ限定的であるため、全教員がより積極的に関わる体制を、中高生徒指導部で連携し、検討していく。	B		B	
特別支援コーディネータと協力し、高機能自閉症について重点的に学び、伸び悩んでいる生徒の能力を引き出す対応策を考える研修会を立案する(中高研究部)	研修会では、中高教員の交流を主軸にICTを活用しそれぞれの考えを共有できるように工夫した。	中高での交流会がこの1回で終わっているので次年度は年間を通して、交流し意見を言い合える場を設けたい。	A		A	

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心をもち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志をもち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	2. 生徒の活動を支えるための、教育環境を整備・充実させるとともに、生徒の将来に向けた進路選択とその実現に向けた取組を行う。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 将来の目標を見据えた進路意識を高めさせ、その実現に向けた支援を行う。	校務支援システムを利用して、中高の基礎データの運用を行う。また、進路用の帳票(個人成績結果表や提出物確認票等)の見直しを行うとともに、運用の円滑化を図る。さらに、校務支援システムを基幹として、生徒の基本データの一元管理を推進する。(教務部)	校務支援システムを運用し、円滑に成績処理やデータ管理を行うことができた。進路用帳票については、検討は行ったが新規の提案までには至らなかった。	連絡進学者の生徒データを中高の校務支援間でスムーズに移行できるようにする。 電車遅延である旨が通知表に自動反映されるよう業者に要望する。 成績会議資料の作成も校務支援システムだけで完結できるようにする。	A		A	
	(中高)令和3年度より取り組んでいるキャリア・パスポートについて、本校の特色ある学校行事・日常的な教科教育・特別活動を反映した附属天王寺型の書式を作成する。(R4 検討R5 実施を目指す) (高)生徒へ校外内問わず幅広く様々な情報を提供し、生徒一人ひとりが高い志をもち続けられるよう、進路意識の高揚に努める。(進路指導部)	(中高)キャリア・パスポートの書式案を作成し、現高1で試行し始めた。(2月末) (高)紙での配布とクラスルームへの投稿を活用し、大学・各入試・大学や企業のイベント・高大連携プロジェクトなど、どの学年にも幅広く情報提供することができた。	(中高)キャリア・パスポートの試行結果を経て、書式・構成について改良を重ねる。 (高)情報提供はできたが、どの生徒も見ないまま流れてしまう情報で重要なものが混ざっていないか、進路にかかわらず生徒の探究心を刺激するような情報はきちんと提供できているかを再度見直し、方法を変える。	A		B	
(2) 生徒と教員が協働して健康と安全を意識した教育環境の整備を図る。	「安全」と「感染防止」への意識を高める指導を引き続き徹底しつつ、実験や観察を多く実施する。(理科)	「安全」「感染防止」の指導面での対応も引き続き行い、問題なく授業が実施できた。	今後も継続していくとともに、試薬・器具の安全な取り扱いの指導により一層取り組む。	A		A	
	管理職や大学と連携し、生徒たちが安心してのびのびと芸術活動に取り組むことができるよう、音楽室や音楽棟の環境整備を早急にすすめる。(音楽科)	昨年度に引き続き、事務室や校務員と連携しながら、生徒とともに物品の整理をすすめているが、状況はあまり変わっていない。本校の芸術の伝統を継承・発展させていくためには、音を学ぶ「場所」が必要不可欠である。	本校の音楽室には楽器庫がないため、楽器を安全に保管する場所がない状況が続いている。また音楽棟についても使用が一部できなく、生徒の芸術活動に制限がかかっている。引き続きこの状況の改善を具申し、生徒たちが安心して芸術活動ができる環境を整えていきたい。	C		B	

	学校が有する防犯、災害リスクに対して、生徒・教職員がリスクを共有し、予防的行動を適切に行えるように、訓練やマニュアルの整備を行い、生徒・教員の減災・防犯意識を高められる安全教育を推進する。(健人部)	年度当初に防犯と防災のそれぞれのマニュアルを統合した危機管理マニュアルを作成した。また、6月に防犯、11月に防災の2回の避難訓練を実施した。	防犯避難訓練では、緊急放送が聞こえなかった場所があったり、大グラウンドの放送設備が使用できなかったりと、事前に放送機器を確認しておくことが必要であった。また、安全講話を聞く生徒の態度にも課題が見られたことより、生徒・教員の避難訓練に対する意識変革の取組も今後必要だと考える。	B		B	
	校内の設備の不具合について、大学や事務室と連携をとり、生徒の学習環境の改善を図る。(庶務部)	普通教室のプロジェクターや東南館のカーテンなど、適宜対応を行い、生徒の学習環境を改善できた。	経年変化に伴い老朽化している部分もあり、今後も対応が必要な部分が出てきている。	A		A	

学校教育目標	<ul style="list-style-type: none"> ●正義を愛し、真理を追究する旺盛な向学心を持ち、透徹した判断力を養う。 ●強固な意志を持ち、頑健な心身を育て、自主的・積極的な実践力を身につける。 ●他人を愛し、自然の恵みに心寄せる豊かな感性を育てる。 ●社会の一員となるための、責任感・遵法・奉仕・協調の精神を養う。
学校教育計画	3. 学校独自の取組を通してカリキュラム全体の充実を図り、教育研究・教育実習・生徒指導の各領域における成果を発信する。

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価 を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 現代的な学力観に対応した教科指導法の工夫と、カリキュラム全体の改善を図る。 また、ICTを活用した学習指導の実践を進め、その効果と課題を探る。	各言語活動に対する評価の方法を探求し、生徒の能力の向上に付与できるメソッドを開発する。ICTを活用した授業実践を行い、校種・学年を超えて授業づくりを行う。(国語科)	年に3回の研究協議では、事前に記録した授業の様子をもとに、小中高の教員が主体的に意見を交換することができた。ICTの活用や教科横断的な取り組みについても、様々な実践を検討することができた。	今年度明らかになったICTの活用や教科横断的な取り組みをする上での課題について、どのようなアプローチをするべきか検討していくことが引き続き求められる。	A		A	
	授業内容において、中高社会科での連携や他教科との連携を考え、実践する。授業方法も工夫し、多様な視点で事象を理解でき、それを積極的に表現・発信できる生徒を育成することを目的として授業方法を工夫し実践する。(社会科)	多様な視点で事象を理解し、それを積極的に表現・発信できる生徒を育成することを目的とした授業を実践することができた。状況に応じてICTも積極的に活用し、その効果と課題を探ることができた。	中高連携をより深め、カリキュラム全体の改善を図る。特に、授業内容について、教科や学年、校種を超えた、横断的な学習の取り組みを進める。	B		B	
	目的に応じたICT機器を活用した授業の実践に 取り組み、その学習効果の評価方法について整理検討する。(理科)	Google Classroomに加えて、中学校では授業支援ツールを検討し、授業中に生徒の成果物を提示するなどの取り組みを行っている。高校は来春からのBYODに向けて課題を整理した。他方で、学習効果の評価には至っていない。	中高ともに、ICT機器を活用した授業の学習効果の評価方法について整理検討する。	B		B	

<p>ICT 機器を利用した動画の撮影やチームでの活動を通して、お互いに成長し合えるように協働的な活動を取り入れる。(保健体育科)</p>	<p>高校の陸上の授業のなかで、自分たちで動画を撮影し、動きを客観視しながらアドバイスしあうことで動きの改善に繋げることができるなど、協働的な学習ができた。中学では大学と連携し、心拍数等を図る機材を使用し、運動負荷をリアルタイムで把握する試みを行った。</p>	<p>陸上など、球技以外のスポーツでのICTの活用の仕方について、活用方法を引き続き模索する。</p>	<p>B</p>		<p>B</p>
<p>ICT 活動を促進し、デジタル教科書を使用することによって、自ら学び続ける生徒を育てる。(英語科)</p>	<p>思考ツールやアイデアを共有する方法として、アプリケーションを活用した。また、Google Classroom を介して(解説)動画や教材を共有し、生徒が場所を選ばず学べる環境を用意した。</p>	<p>今年度から、デジタル教科書が導入されたが、生徒のデジタル教科書の活用頻度は低い。そのため、その課題と有効性を検証していく必要がある。</p>	<p>A</p>		<p>A</p>
<p>異学年集団による音楽科授業を実施し、その効果と課題を探る。(中) 音楽を通じた大学との連携をすすめ、高校生と大学生双方の「協働する力」を育む。(高)(音楽科)</p>	<p>昨年度に引き続き、中学1年生と2年生で同一課題による合同歌唱授業を実施した。互いが刺激し合う環境となり、歌唱技能の高まりがみられた。(中) 高校と大学の音楽科授業がコラボレーションした演奏会を12月に体育館で実施し、好評であった。(高)</p>	<p>2年間の実践を生かし、取り組みを継続するとともに、校種を超えた中高異学年集団による授業を計画したい。 大学に当事者意識がなく、大学生の指導を現場に任せきりであった。本来の大学授業の趣旨を教授と再度確認して、連携をすすめたい。(高)</p>	<p>A</p>		<p>A</p>
<p>新学習指導要領における評価方法のありかたの方向性を示すとともに、GoogleClassroom や Teams 等の ICT を活用した学習指導にかかわる環境整備の支援を行う。(教務部)</p>	<p>新学習指導要領における評価の指針を示すことができた。Teams を基軸とした業務の円滑化を心がけた。中高での情報共有も進んでいると考えるが、まだ改善の余地があり、次年度に向けた検討課題とした。また、本年度はGoogleClassroom を基軸に学習環境を運用するとともに、中学校では庶務部と連携してロイロノートやメタモジクラスルームといった授業支援ツールの検討を行ったほか、高校では BYOD 化に伴う授業内での ICT 機器の活用の方向性について検討を行った。</p>	<p>クラスルームや Teams のより効果的な使い方を模索・検討する。</p>	<p>A</p>		<p>A</p>
<p>附属学校課や他部署と密に連絡を取り合い ICT を活用した授業実践を行うための環境を整える。 ICT 支援員制度を活用し、機器の整備や授業実践へのサポートをする。 Chromebook を中学生に配布し生徒のスキル向上のための基盤を作る。(庶務部)</p>	<p>多くの場面で、附属学校課や ICT 支援員と連携をとり、機器の整備を行った。 中学校については Chromebook を全生徒に配布し、授業の活用の場面が増えるように準備を行った。同時に授業支援ツールを試験的に導入し検討を進めた。</p>	<p>BYODの推進に合わせて環境面での対応が今後も検討していく必要がある。</p>	<p>A</p>		<p>A</p>

	<p>生徒指導における ICT の活用を模索し、生徒会活動、行事、部活動などの場面で ICT 活用を実践する。また、情報モラル研修などを企画し、生徒が安全で正しく ICT を活用できるよう、適切な支援を行う。(生徒指導部)</p>	<p>さまざまな行事において、ICT をより効果的に活用できるように指導することができた。また、情報モラルの育成のための企画や研修、指導などを行い、生徒が安全に正しく ICT を活用できるよう支援することができた。</p>	<p>ICT 機器のさらなる活用とともに、情報モラルの意識向上も継続して行う。生徒に対してだけではなく、教員の ICT 活用と情報モラル指導のための研修など、生徒指導部を中心に行っていきたい。</p>	A		A	
	<p>コンピテンシー(資質・能力)を軸にした授業デザインを検討する。(中高研究部)</p>	<p>各教科で検討を始めた。教育研究会では発表教科はテーマを中心に発表することができた。個別最適化した授業デザインの検討を行うことができた。</p>	<p>教科ごと、または各自での取り組みは行うことは出来たが、その共有の時間を持つことが出来なかった。共有の時間を次年度は、増やし、ICT の活用についても検討する。</p>	A		A	
(2)社会の国際化や多様化に対応する力の育成に向けた取組を進める。	<p>社会科で育てたい共通のコンピテンシーについて議論をし、明確化する。それをもとに中高社会科が連携し、情報交換や授業見学を積極的に実施する。(社会科)</p>	<p>社会科で育てたい共通のコンピテンシーについて議論をし、共通の指針を立てることができた。それをもとに中高社会科が連携し、情報交換や授業見学を一部実施することができた。</p>	<p>社会科における共通のコンピテンシーを、どのように育成していくのか議論し、授業改善を行う。また、中高での情報交換と授業見学をより一層積極的に行う。</p>	B		B	
	<p>数学教育を通して養い育てるべき生徒のコンピテンシーを明らかにする。その中高一貫ルーブリックを作成し、それに沿った教育内容開発・授業実践を試みる(試みの一端を教育研究会で公開する)。また、次年度へ向け「中高数学科オリジナル STEAM 教育」の構築を目指す。(数学科)</p>	<p>9つのコンピテンシーにまとめ、それに沿った授業実践・教材開発を試みる事ができた。また、試みの一端を教育研究会などの公開授業や、研究集録を通して発信することができた。</p>	<p>来年度に向けて、中高数学科の STEAM 教育の構築が実現できるような体制を検討していく必要がある。</p>	A		A	
	<p>中高の連携を強化するために、理科のものの方・考え方を通して6年間で育成したいコンピテンシーを具体的にあらわし、普段の授業のあり方を見直す。(理科)</p>	<p>本校のグラデュエーションポリシーを基盤に、理科を通して身につけさせたい「科学的に探究する力」について、具体的にまとめた。教育研究会にてその結果を発表するとともに、「分析・表現させる授業の実践」として発表した。</p>	<p>「科学的に探究する力」を育成するための6年間の実習・実験などを整理する。</p>	A		A	
	<p>昨年度中高それぞれが作成した CAN-DO リストをもとに授業実践を行い、中高の接続について協議しながら、一貫した指針を持てるようリストの統合を図る。(英語科)</p>	<p>CAN-DO リストに掲げているゴールを意識しながら授業実践を行い、それぞれの取り組みを教科内で共有した。また、達成状況を測る方法の検討や検討した手法を用いて試行的に CAN-DO リストの検証も一部で行うことができた。</p>	<p>CAN-DO リストの分析と検証、及び中高のリストの統合には課題が残った。</p>	C		B	

	<p>(中) 中学3年生を対象に、進路指導通信「羅針盤」を毎月発行し、中学での活動や学びのプロセスを明確にし、蓄積した記録を共有することで円滑な接続を図る。</p> <p>(高) 中学での活動や学びのプロセスの記録を共有して個々人に継続的な指導を図るための準備を進める。(R5実施を目指す)(進路指導部)</p>	<p>(中) 左記の計画通りに実施した。</p> <p>(高) 中学校で実施されている取り組みを把握するとともに、現高1でその記録データの回収を試みた。(2月末)</p>	<p>(中) 進路指導に係る事務的な内容が中心となったことから、次年度以降は附属高等学校での学習や行事といった点についても発信することができるようにする。</p> <p>(高) 今年度個々の記録を回収した結果を踏まえて、次年度以降どのように行うかを早急に検討し4月には確定する。</p>	B		B	
	<p>年3回の小中高推進日で話された各教科の内容を職員会議で報告し、社会との連携を進める。(中高研究部)</p>	<p>小中高推進日を利用し情報交換を行った。</p>	<p>3学期小学校主担の企画連絡が遅れ、各教科で日程の調整が難しく実施困難な教科もあった。次年度は、年間を見通した運営を行いたい。</p>	B		B	
(3)本校の実践を広く地域に発信するとともに、教育実践・地域活動での地域との連携を進める。	<p>教育研究会でよりよい実践を提案・紹介する。(保健体育科)</p>	<p>教育研究会で体育の授業実践について発表し、参観者からフィードバックや今後の研究活動について見識を深めることができた。高校保健においても、全庁車で発表した。</p>		A		B	
	<p>日々の授業実践や生徒が芸術活動に取り組む姿をホームページで積極的に発信する。(音楽科)</p>	<p>音楽科授業における取り組みを本校・大学ホームページで広く発信した。</p>	<p>保護者や地域の方々に本校生徒が心から音楽を楽しんで演奏する姿を、今後も積極的に発信する。</p>	A		A	
	<p>大学や地域の防災関係者と連携し、学校防災力だけでなく、地域特有の災害的特徴を踏まえて、安全教育の構築および実践について研究を進めていく。(健人部)</p>	<p>大学や天王寺消防署と連携しながら、避難訓練要綱を作成し、訓練を実施した。訓練後には、消防署の方に講話もしてもらった。また、技術・家庭科をはじめとする教科や学年で安全教育を進めている。</p>	<p>天王寺消防署以外の地域の防災関係者と連携しながら、学校防災力の向上に努めていくとともに、外部機関にも本校の取組を発信していきたい。</p>	A		A	
	<p>教科横断の取り組みを通して、附属天王寺型教科横断の定義づけを行う。(中高研究部)</p>	<p>3月末には有志教員による教科横断の取り組みを行い、パネラーとして事業を行っている方に依頼した。</p>	<p>今年度は、教科横断の取り組みの2年目として、有志教員で発表を行い、HPで呼びかけたが、次年度は取り組みの実践を増やしたい。</p>	A		A	

<p>学校関係者評価における意見</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・教員の自己点検による評価結果は概ね妥当と思われる。 ・教育に関する用語や、内部で使われている用語に一般的に理解しづらいものもあることから、わかりやすく、一般の人にも理解しやすい表現を目指してほしい。
----------------------	---

